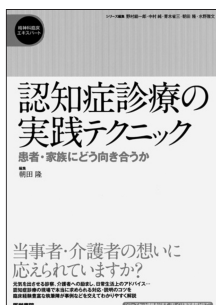


■ 書 評



認知症診療の実践テクニック
患者・家族にどう向き合うか

朝田 隆 編
医学書院 2011年10月
196頁, 定価 6,090円

本書は「精神科臨床エキスパート」と名づけられた5冊のシリーズの一部である。副題として「患者・家族にどう向き合うか」とある。精神科エキスパートとはそもそも何をさしているのであろうか。特に優れた才能や技術を持つ人たちのことをエキスパートと呼ぶのであれば、書評子を含め多くの精神科医はその部類には入らないであろう。特殊な患者たちを専門に治療していて、その分野で卓越した診断能力や治療技術を持ち合わせているというのは一部の精神科医に過ぎない。われわれ街中の精神科医は、広く浅くあらゆる精神疾患を診なければならぬ。とはいっても、精神医学分野であれば、ほかの診療科の医師と比較すれば、精神科医がエキスパートである。当たり前であるが、これについては精神科医としては多少の自負がある。しかし認知症ではどうであろうか。

いくつかの診療科の間で重なり合う分野があり、どちらでも扱うという疾患がある。その1つが認知症である。認知症は、精神科のみならず、内科では神経内科も対象とし、脳外科でも診察している医師がいる。このような中で、精神科医がどうあればエキスパートと呼ばれるのであろうか。画像診断を含む神経学的な検索では神経内科にかなわないような気がする。一方、患者の心理や行動の理解、さらには患者をめぐる家族の力動などは、精神科医の得意とするところであろう。しかし、そのためにわれわれ精神科医はどれくらい認知症患者の心理や家族の力動を知っているのであろうか。あるいは、頭で知っていても、患者やその家族にどのように説明し、どのように働きかければよいのであろうか。本書は

このような問題に対して、丁寧かつ親切な答えを提示してくれる。

全体は6章に分かれている。第1章では認知症の予防策について、教科書的なエビデンスに加え、実際の臨床場面での予防への工夫が語られる。著者らの認知症予防に対する地域での活躍なども紹介されている。第2章は、急に新薬が増加した認知症の薬物療法がきちんと教科書的に記述されている。第3章は物忘れ外来における認知症患者とのコミュニケーションが、実際に患者から語られる言葉を媒介として、具体的に書かれている。統合失調症との会話は得意であるが、認知症患者やその家族とのやり取りは苦手な精神科医も多いであろう。第4章は、前頭側頭型認知症やレビー小体型認知症などの非アルツハイマー型の認知症を扱い、診断と治療のための知識が系統的に解説されている。内容は病理所見の説明も加えてかなり高度である。

本書の特色はおそらく最後の2章にあるであろう。第5章は「介護者のこころをケアする」と題されて、家族を主とする介護者への精神的な援助の必要性と介護者のストレスへの適切な対応などが説明されている。精神的援助といっても、その背後には精神医学的な分析があり、単なる専門家の忠告とは色合いが異なる。著者の実地医家らしい丁寧でやさしい診療風景を垣間見ることができるだけでなく、具体的な対処法のひとつひとつは一般の精神科医にとっても大変に役立つであろう。最終の第6章は、編集者自身による執筆である。患者の問題行動のいくつか具体的に取り上げられ、その対処について患者家族へのアドバイスが提示されている。行動の背後にある認知症者の心理や脳機能の障害が説明され、なぜそのような対処が有効であるかが説明されている。一方で、このような公式的な内容にとどまらず、著者の臨床活動の中から見出されたいくつかの工夫や秘訣は、経験に裏打ちされたものだけに貴重である。

全体に既述は具体的、实际的であり、たいへん読みやすい。認知症の治療や薬物療法の最新の知識だけでなく、認知症患者の行動の意味や、取り巻く家族の困惑に対する適切な指導法などを知りたい実地の精神科医には、大変有用な一冊である。

(仙波 純一)